

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	山崎 徳子
論文題目	自閉症のある子どもの関係発達 —「育てる - 育てられる」という枠組みでの自己感の形成を中心に—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、自閉症のある子どもの自己感の形成過程を、ある障碍児学童保育の場「P」におけるいくつかの実践事例を手掛かりにして解明したものである。</p> <p>自閉症については、これまで数多くの研究がなされ、知見が積みあげられてきたが、そのほとんどは今ある子どもの「症状」について、その原因や成り立ちを究明し、その軽減を目指すものであり、子どもに関わる者—特に親をはじめとする養育者や保育者—の主観的な体験はいまだ十分に明らかにされていない。また、そこにおける子どもは、あたかも「症状」や「(不完全な)機能」の「束(寄せ集め)」であるかのように描かれており、一人の人間として、他者とさまざまな形でコミュニケーションをしながら営んでいるはずのその子の「生活」や、その積み重ねによって生み出されていく「心の育ち」が見えてこないという問題もある。</p> <p>申請者は、自閉症児の親は、そうした先行研究が暗に前提しているような単なる「共同療育者」ではなく、わが子の幸せを願うと同時に、自分自身もまた固有の願いや苦悩を抱える一個の主体であると指摘する。そして、子どもを「育てる者」のひきこもごもの思いと、子どもの「心の育ち」は切っても切り離せない関係にあるという視点から、子どもの「自己感」の形成を明らかにする必要性を説くのである。自己感とは、D・スターンの提起した用語であり、「自己」(および他者)に関わる子どもの諸々の主観的体験と、「育てる者」に立ち現れるその都度の子どもの印象を説明するための鍵概念だとされる。</p> <p>この問題にアプローチするために、申請者はまず、①自閉症児の自己感の形成について手掛かりを与えてくれそうないくつかの先行研究を概観し、これらと自身の養育経験を織り合わせながら、仮設的に自己感の形成プロセスを描出する、②障碍児学童保育Pの指導員として7年間にわたり「関与観察」を行った、その観察の方法論を精緻化する、という作業を行っている。</p> <p>①については、スターンの「中核的自己感」が実は養育者との間身体的コミュニケーションを前提にしているという立場から、自閉症児においてはそのコミュニケーション自体が難しいという村上靖彦の理論を抛り所に、異なった自己感の発達過程があり得ることを指摘する。また、特に「言語的自己感」の発生過程についてはワロンの自我論を援用しながらより詳細に把握し、これを鯨岡峻の理論—「育てる - 育てられる」関係の中で、子どもが「私は私」と「私は私たち」の二面から成る心を育てていく—につなぐことによって、自閉症児の自己感の形成過程を、育てる者の実感に沿った形で扱うための理論的枠組みを準備した。</p> <p>②については、申請者自身が以前別の観察現場で感じた「おじゃまする感」や、障碍児学童保育Pで体験した「観られる経験」など、観察に伴われる違和感を詳細に分析し、「実践者」と「観察者」のあいだの溝が何によって生み出されるかを明らかにしている。すなわち、その溝は、自分が実践者として関わるか否かといった観察形態によってというよりは、むしろ子どもの幸せを願いつつ、身体的直観に基づいてその都度の関わりの</p>			

意味を考えていく「共同する者」として当事者と関係を結べるか否かによって、広がりもすれば狭まりもするという視点から、自身の観察を「共同する者」によるそれと位置づけた。

こうした理論的整備を踏まえて、数年間をかけて得られた3人の子どもの障害児学童保育Pにおける多数のエピソードと、その母親へのインタビューを分析し、自閉症の子どもの個性的な自己感の形成過程を描き出した。

保育者と情動的な「楽しさ」を共有することによって、他者の身体的把握が可能になっていった「桃」の事例、象徴的な描画「棒人間」にその都度の自己を投影し、それを用いて徐々に他者とのコミュニケーションの世界に開かれていった「まさき」の事例、いわゆる「軽度発達障碍」の部類に入るかもしれないが、やはり自己感の成立に固有の困難を持っており、ゆっくりと他者を思いやる心を育てていった「きりた」の事例などから得られた理論的帰結（自閉症児の自己感の形成過程）は次のようなものである。

- ①間身体性の働きが弱いため、養育者との通じあいに基づいた中核的自己感を形成するのではなく、衝動的行為の動作主としての「自らなす自己感」を形成する。
- ②養育者の努力やかかわりによって、「馴染みの光景」としての養育者とのあいだにとりあえぬの安心感を持てるようになってくる。
- ③世界が一定程度秩序だったものになってくることによって、その世界を変えていけるという感覚（「行為の主体としての自己感」）を持つ。
- ④「行為の主体としての自己感」を基盤として、個別具体的な他者との相互交流を経験し、その中で楽しさや安心感などの肯定的感情を体験することによって、身体が「覚醒」してくる。一時的に「手応えのある自己感」が得られる。
- ⑤「手応えのある自己感」は、子どもの情動状態によっては容易にほどけて、前の「行為の主体としての自己感」に戻ることがある。
- ⑥事物の表象化が進む。子どもが用意した自己の代替物に対して他者が関心を示すことによって、それが「自己の表象」としての位置を獲得していく。その「自己の表象」を用いて、他者とコミュニケーションをすることによって、それはより豊かなものになっていく。
- ⑦「手応えのある自己感」と「自己の表象」とが溶け合い、「私」の意識と「私は私たち」の意識が成立してくる。
- ⑧子どもによっては、そこからさらに自己を客観的にまなざす視点を発展させ、うまくやれているという感覚や達成感などの自己肯定感が生み出されてくる。

以上のように、本論文は、子どもを「育てる者」の視点から、子どもや養育者・保育者の思いをつぶさに描き出すと同時に、自閉症児における自己感の形成という難問に挑み、事例に基づく説得力のある仮説を生み出したものである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、自閉症の子どもを一人の人間として「育てる」という観点が、これまでの自閉症研究に欠落していることを指摘し、その観点から自閉症の子どもの「自己感」の形成過程を明らかにするという難問に果敢に挑み、一定の知見を生み出したものとして評価できる。

これまでの自閉症研究の多くは、自閉症の子どもを特徴的な「症状」や「(不十分な)機能」の「束」と捉え、その原因の解明や、それら「症状」「機能」の改善を目指すものであった。また、行動療法的アプローチにしる、心理療法的アプローチにしる、自閉症児の親はせいぜい「共同療育者」として位置づけられるのみであって、さまざまな喜怒哀楽や苦悩を経験しながら、わが子と気持ちを通い合わせることで、少しでも生活しやすくなることを願って暮らしている養育者の主観的体験(「育てる」にまつわる諸々の経験)は十分に明らかにされてこなかった。本研究は、そのような①部分的能力の寄せ集めとしての子ども理解、②本来一個の主体である養育者の「共同療育者」への還元、に異を唱え、むしろ①' 一個の全体として他者や世界に臨む子どもの主観的体験、すなわち子どもの「自己感」に着目する、②' 養育者の思いと子どもの「自己感」の育ちは切っても切り離せない関係にあるという視点から両者の絡み合いを描く、という斬新な問題意識に立っている。

①' の理論的準備として、本研究はまず、スターンやワロン、村上靖彦や鯨岡峻などの理論を織りあわせて、「育てる者」の実感に沿った一般的な子どもの自己感の形成過程を描出し、自閉症児の場合には、これとは違ったプロセスが進行する可能性を示唆した。特にスターンの「中核的自己感」が、実は養育者との間身体的コミュニケーションを前提にしていること、それが自閉症児においては弱いために独自の発達ラインが想定されることを指摘した点、また、そこに「育てる者」ならではの諸々の思いが抜き差しならず食い込んでくるという観点は、申請者のオリジナリティが最も発揮された個所の一つである。

また、②' の理論的準備としては、養育者の思いや子どもの思いを捉えていくための方法論の精緻化を行っている。そこでは、申請者自身が体験した観察にまつわる諸々の違和感を詳細に分析し、自閉症児の親たちと「共同する者」として観察・研究を行っていくという姿勢を打ち出している。ここでの議論は、いわゆる質的心理学研究において昨今議論されている「観察者」の位置のあり方について、先進的な示唆を与えるものであると言える。

さらに、こうした理論的整備を踏まえて具体的に描かれた3人の子どもの事例は、本論文の最大の特長と言えるものであり、さまざまな解釈の可能性のある豊かで、興味深いエピソードがいくつも並ぶ。また、そこで描かれる養育者は、まさに自閉症の子どもを、さまざまな喜怒哀楽を経験しながら育てている「一個の主体」であり、子どもと養育者それぞれの思いが実に生き生きと照らし出されている。このエピソードやインタビューを読むだけでも、自閉症の子どもを育てるという営みがどのようなものなのか、身体的な手応えを持って伝わってくる。

そして、これらの事例を通じて導き出された自閉症児の自己感の形成過程の8段階は、次のように極めて独特のものであった。

- ①養育者との間身体的コミュニケーションに裏付けられない「自らなす自己感」
- ②「馴染みの光景」としての養育者との一定の安心感
- ③世界の秩序化と、「行為の主体としての自己感」
- ④他者との相互交流を通じた情動的共有体験

- ⑤「手応えのある自己感」の体験
- ⑥事物の表象化と「自己の表象」の使用
- ⑦「手応えのある自己感」と「自己の表象」の溶け合い
- ⑧さらなる客観的視点の獲得と、自己肯定感の形成

自己感の形成過程、および自閉症児の主観的体験についてのこれらの新しい見解は、今後さらに精緻な理論的検討・検証作業が必要であるという課題はあるものの、事例に裏付けられた説得力を有しており、自閉症児理解のための一つの有力な見方を提示するものであることは、すでに保育学等の専門誌によっても認められているところである。

本研究は、「自己 - 他者」の成り立ちという古くからの哲学的・心理学的難問に関心を持つ研究者に対して新しい検討材料を提供すると同時に、療育の立場にある人々には子どもを一人の全体的人間として捉え、その心の育ちを支援していくという枠組みの重要性を訴えかけ、さらには自閉症の子を持つ当事者たちには自分と同様の困難を経験しつつ、このように生活・成長していつている人たちがいるという励ましを与えるものであり、その学術的・実践的意義は非常に大きいものだと思われる。

自らの知見の理論的位置づけに関してはまだ展開の余地を残していることや、議論に用いられる概念の多少の曖昧さなどはあるものの、それらは今後申請者がさらに障碍児学童保育Pでの実践と理論的検討を深めていくことによって、より発展的に解消されていくための「生産的な多義性」であると思われる。

以上のように、本学位申請論文は、自閉症児の自己感の形成過程を、わが子を「育てる」という養育者の営みと絡めながら明らかにしたオリジナリティあふれる研究であり、共生人間学専攻人間社会論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって、本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成25年6月3日、論文内容とそれに関連した事項についての試問を行なった結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：                      年              月              日以降